

## ヤンゴン素描 7

### ビルマ三大王の像

ヤンゴンの下町から北へ向かうピー街道沿いに沿って、国立博物館がある。5ドルの入場料は高い気がするが、前庭に立つ3人の大王のブロンズ像はただで見られる。それぞれ個性的な像だが、その容貌について当時の記録が残っているわけではなく、彫刻家ウ・ハン・タン (U Han Tan (1926-2000)) の洞察力の賜物である。



#### アノーヤター王 (在位 1044-77 年)

アノーヤター (アノーラター) 王は、バガン王朝 (第一ビルマ帝国) の創始者。密教色が強く腐敗していた大乘仏教を遠ざけ、上座部仏教による統治の仕組みを作り、バガン寺院群の建設に着手した。

王冠の鱗の重なりは、伝説のメルー山 (須弥山) を主峰とするヒマラヤの意匠だろう。宇宙の調和と一体化する賢王のイメージ。トーガのような布を左の肩でとめ、視線を高く保つ賢者の面立ち。挿絵には出ていないが、左手には経典一式を持って、仏教擁護者であることを示している。

ビルマ族にとっては英雄だが、経典を強奪され、僧侶を強制連行されたモン族にとっては、先進文明を蹂躪した、憎っくき敵である。

## バインナウン王（在位 1551－81 年）



バガン王朝がモンゴル軍に滅ぼされたあとの混乱を鎮めたバインナウン王は、中部乾燥地帯の覇者となり、タウンゲー王朝（第二ビルマ帝国）を起こした。腕組みをして見るからに精悍な武人像は、後ろに重心をかけ、前を睨み付けている。その姿勢と顔つきと服装が、「王様と私」でユル・ブリンナーが演じたシャム国王を思い起こさせる。私のスケッチも、ついつい劇画調になってしまった。

だが現在のタイ、ラオスにまで及んだ彼の膨張政策が、帝国の崩壊を早める原因となった。タウンゲーの町にも彼の銅像があるが、国立博物館のこの作の方が性格をよく表

していると、私は思う。

## アラウンパヤー王（在位 1752－60 年）

コンバウン朝（第三ビルマ帝国）の基礎を作ったアラウンパヤー王は、複雑な顔をしている。細身で一見柔和な姿は、武人と言うよりは老練な政治家のようだ。王者の象徴であるダイヤモンド形の短剣を右手に持ち、その切っ先を左手でいじりながら、次はだれをどう攻めようかと思案しているようだ。外交と戦争をたくみに組み合わせる食わせ者。ときにはユーモアで人をたぶらかす術も知っていたのだろう。油断ならぬトリックスターを思わせる。だが、ヤンゴンの町を開いたこの男が、やわであったはずがない。



三人の大王像は季節や時刻で表情を変える。日本の戦国時代に終止符を打った三傑、信長、秀吉、家康のイメージと比べてみると面白い。多民族国家の国立博物館に、ビルマ族の帝王像だけが置かれていることに、強い政治的意図が感じられる。